

— 働くことの聖書的な意味 —



**THEOLOGY
OF
WORK**

目次

I 神がデザインした労働

- 1.1・人間に与えられた使命 創世記 1:28、2:15-20
- 1.2・神と共に働く創造性 詩篇 104 篇
- 1.3・神の安息 創世記 2:1-3

II 墮落の結果の労働

- 2.1・罪の結果の労働 創世記 3:14-19
- 2.2・永遠を失った働き 伝道者の書 1:1-11
- 2.3・罪によって汚染された働く動機 創世記 11:1-9
- 2.4・正しいことを行えない罪の現実 ローマ 7 章

III 贖われる労働

- 3.1・私たちのうちに働かれる神の義 ローマ 3:21-26
- 3.2・万物の和解 2 コリント 5:16-21
- 3.3・「救い」の福音 ローマ 1:16-17

IV 具体的な働き方

- 4.1・職場において地の塩・世の光となる マタイ 5:13-16
- 4.2・舌を制御する 2 テモテ 2:14-26
- 4.3・怒りを避けて聞く ヤコブ 1:19-21

番外編：終末における労働の意味

- ・ 2つの都①バビロン 黙示録 18:4-20
- ・ 2つの都②新しいエルサレム 黙示録 21:10-22:5
- ・ コラム：世界の終わり=仕事の終わり？ 2 ペテロ 3 章

「働くことの聖書的な意味」

~Theology of work~

働くことについて聖書は何を語っているのでしょうか。

「働く」という視点で聖書を読むと、労働は単に生きるために必要な事柄ではなく、世界の創造の時から神様によって意図された私たちのクリスチャンとしての使命であることが分かります。聖書の救いの全体像を「働く」というレンズを通して見たとき、私たちのクリスチャンとして働くことに対するイメージは変わってくるでしょう。

神学者や牧師によって、働くことについての神学的な意味を深めることを目的として設立された Theology of Work（労働の神学）グループの聖書注解から抜粋し、邦訳し、ディスカッションのための質問を追加したのが本書です。職場の昼休み 30 分程度でも出来るようにそれぞれの学びはコンパクトにまとめられています。職場での「社内聖研」、同期会、教会の小グループでの学びなど様々な場面にお使いいただけます。

また、Theology of Work の資料はネット上で無料公開されているので興味のある方は以下のアドレスから他の学びも閲覧可能です。

<https://www.theologyofwork.org/>

1.1 人間に与えられた使命

創世記 1:28、2:15-20

私たちは神のかたちで創られているため、実を結び、創造的(クリエイティブ)な事が出来ます。創世記 1:28「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地を這うすべての生き物を支配せよ。」は「創造命令」、もしくは「文化命令」と呼ばれています。神様は理想的なプラットフォームとして完璧な被造世界を創りました。そしてその地に人類を創り、創造の壮大なプロジェクトを引き継ぐものとさせました。「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。地を従えよ。」と神様は人に命じました。神様は創造しうる全てを自ら創造し、自ら地に満たす事が出来たはずですが、しかし、神様は人間を創造し、共に働くという方法を選ばれたのです。神様は私たち人間を信頼し、神様が与えてくださった素晴らしい地の上に働きを建て上げるという役割を与えてくださいました。これは驚くべき事です。私たちの働きを通して、神様は食べ物、飲み物、製品、サービス、知識、美、組織、地域、健康や成長を与えてくださいます。そしてそれらの事を通して神様ご自身に栄光が帰せられる事になるのです。

創世記 2:15「神である主は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた。」興味深い事に、ヘブル語のアバド(働く、耕すと訳される)、シャマー(守る、保つと訳される)という言葉は神様を礼拝するという文脈においても用いられる言葉です。神様の目的に沿った働きは、神様の聖さを現し、神様を礼拝する事に繋がります。

アダムとエバは創世記 2:15-20 において二種類の具体的な仕事を与えられました。それは耕す事(肉体労働)と動物の名前をつける事(文化的、科学的、知的な働き)でした。それらは両方とも創造主の姿に創られた人間に与えられた創造的な仕事でした。

土地を耕し、文化を形成する事により私たちは実を結ぶものとなります。私たちは増加する人口を養うために必要な資源を生み出し、より生産的に創造の業を拡大できるよう働きます。地を耕し、動物に名前をつけるという事が人間にとって唯一の与えられた具体的な仕事だったというわけではありません。むしろ人間の役割は、神様が定められた限界を超える事が無い限りにおいて、与えられた創造性と賜物を用いて、神様の創造豊かな働きをこの地に拡大していく事です。

ディスカッション

- ① 神様はなぜ自ら全てを創造せず、人間と共にこの地を治める事を選ばれたと思いますか。
- ② 「耕す」、「名前をつける」という仕事は現代の私たちの働きにどのように繋がっているのでしょうか。
- ③ 「労働」と「礼拝」にはどのような繋がりがあるのでしょうか。どのようにしたら仕事の中で神様を礼拝する事が出来るのでしょうか。

1.2 神と共に働く創造性

詩編 104 編

創造の御業の最初から、神様は労働を創造性豊かなものとして、また神様ご自身の創造性と共に働くものとしてつくられました。人間の労働は神様の創造性豊かな意図を地上に実現する手段として、人と人をつなぎ、また人と神様をつなぐことにより神様の栄光を表すために計画されました。詩篇 104 篇はこの創造性豊かなパートナーシップを鮮やかに描き出しています。1-9 節では神様の栄光を表す巨大な被造世界のキャンパスが描かれています。そして 10 節以降では動物、鳥、海の生き物が住むその被造世界を維持する神様の働きについて記されています。神様は人間に対しても豊かに与えてくださるお方です。神様の働きが、自然と人間界を実りあるものとしてくださっています。「主はその高殿から山々に水を注がれます。みわざの結ぶ実によって地は満ち足りています。」(13 節)

人間の使命は、神様から与えられたものをさらに建て上げていく働きです。私たちは植物を集め、用いる必要があります。(14 節) 私たちは神様が育ててくださった植物からワインを作り、油を抽出します。(15 節) この詩篇は、被造物が神様に食物を与えてもらえるよう求め、神様が豊かに与えてくださる事を描いています。(27-28 節) しかし同時に人は神様から与えられた賜物を加工し用いながら熱心に働く事が必要です。詩篇 104 篇は神様から与えられた地を管理するための道具についてさえも言及されています。テント(英語の NIV 訳で幕はテント)、衣、梁、

火、船など、驚くべきことに、詩篇の作者はこれらの道具を、人間だけではなく、神様ご自身が喜んで用いておられる様子を描いています。私たちは神様と共に働きます。そして神様の広大な供給は人間の努力の結果から生じる場合もあるのです。

たとえそうだとしても、私たちはいつも創造の御業の中で神様のパートナーであり、主体ではない事を覚えておく必要があります。創世記で人間が最後に創造されたように、詩篇 104 篇においても人間は最後に登場します。しかし創世記との違いは、詩篇 104 篇の場合は全ての被造物が神様の元に集まりハーモニーを奏するようなイメージが描かれていることです。私たちは神様の被造物の一部に過ぎず、家畜、鳥、牛、ライオンなどと共に自らの役割を全うする者です。被造物にはそれぞれ役割があります。人間にとってそれは夜が来るまで労働するという事を意味します。しかしどのような働きだとしても、全ての必要を満たしてくださる方は主です。詩篇 104 篇は神様ご自身が自らの働きを完璧に成し遂げられた事を思い起こさせてくれます。神様と共に働き、聖霊が与えてくださる力に謙虚により頼みながら働くとき、私たちが主と共に働きを成し遂げることが出来ます。神様が恵みによって与えられたこの美しい世界を耕すために。

ディスカッション

- ① 働きにおいて創造性を発揮するとはどういう事でしょうか。
- ② 神様と共に働くために何が必要だと思えますか。
- ③ あなたの働きはどのように創造の働きに参与しますか。

1.3 神の安息

創世記 2:1-3

六日間の創造の御業を終えられた後、神様は創られたものをご覧になり、「非常に良かった」（創世記 1:31）と宣言されました。しかし、神様が何かを「聖い」と宣言されたのは七日目になってからでした。神は七日目の休み、創造の御業に対する時間的、空間的な小休止を「聖い」とされたのです。この安息の日は「聖さ」という神様ご自身の性質を帯びているものとして語られます。

現在、多くの方は休みを働くために必要なものとして捉えています。もし選べるのなら、休む必要のない体を求める人もいるでしょう。現代社会において、休息とは生産性の真逆にあるものとして考えられています。休息とはそれ自身意味を持たず、高次の労働のための必要を満たすものと考えられているのです。これは聖書的な考え方でしょうか。創世記 2 章で神様は働き、そして休まれます。神様の御性質を考えた時、身体的な疲労から休息を必要としていたわけではないということが分かります。神様は生産性を向上するために休む必要があったわけでもありません。なぜならすでに六日目で世界は完成していたのですから。つまり休息には労働のためのエネルギーを補充するという意味があるということは明らかです。

さらに興味深いのは、創造された全てのものの中で最初に「聖い」と宣言されたのは、人でも物でもなく特定の日だったということです。では神様にとって休息とはどのような意味を

持ち、なぜそれを聖いとされたのでしょうか。創世記2章ではその答えは記されていません。次に安息日が登場するのは大分先の出エジプト記16:23-29で、エジプトを脱したあと荒野をさまよっている場面で登場します。その次は十戒の四番目として出エジプト記20:8-11に登場します。「安息日を聖なる日とせよ」という命令は、まさに創世記2章に記されている神が六日間働き七日目を「聖い」とされたパターンを土台としています。「それは主が六日間で、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造り、七日目に休んだからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものとした。」（出エジプト記20:11）イスラエルが安息を命じられているのは、神ご自身が創造の御業の中で安息されたからです。

安息日と聖さについてエゼキエル20:12で神様は「わたしの安息日」を、イスラエルの民が「聖別」されていることを知る「しるし」として与えたと記しています。旧約学者のブルース・ウォルトキはこう述べています。「安息日とは創造者が民との特別な関係を結ばれたしるしである。そのしるしとはタワーのような物理的なものではなく、神ご自身の創造の安息に民が共に参与するという能動的なしるしなのだ。」

ディスカッション

- ① 安息と聞くとどのようなイメージがありますか。
- ② 安息と神の民とはどのような関係があるのでしょうか。
- ③ 休むことが困難な現代社会において、適切な安息をとるために工夫できることはあるか話し合ってみましょう。

2.1 罪の結果の労働

創世記 3:14-19

アダムとエバの決断は、今日の労働に至るまで決定的な影響を及ぼしました。神様は彼らの罪に対する裁きを宣言し、労働が苦役になるという結果を宣言されました。蛇は一生腹ばいで歩き、女は子供を産む苦しみ、男は収穫を得るために「いばらとあざみ」が生える中で労苦しなければならなくなりました。墮落後の人間にも創造の目的である「働く事」は存在し、神様は墮落後も人の必要に答えてくださいます。(17-19節)しかし、労働は困難を伴い、不快なものとなり、失敗と予期せぬ結果を産む可能性があるものとなりました。

大切なのは「労働」が「労苦」になった時が労働の「始まり」ではなかったという事です。労働を罪の結果と考える人もいます。しかし、アダムとエバは罪を犯す前にすでに園で働く仕事を与えられていたのです。(創世記2章)しかし、労働は呪いではないものの、呪いは労働に影響を与えました。墮落の結果、労働の重要性は以前より増したとも言えるでしょう。なぜなら収穫を得るためにより多くの働きが必要となってしまったからです。さらに、神様から与えられた喜びと自由に満ちた土地は搾取の対象となりました。アダムは、死んで地にかえるまで土地を耕すようになり、エバは、助け手としての関係ではなく支配される関係になりました。労働と結婚における他者への支配は神様の本来の計画ではありませんでした。しかし罪によって墮落し、神様との関係が壊れた人間が産み出した新しい人との関わり方だったのです。(12-13節)

私たちは日々、二種類の悪を目にします。一つ目の悪は自然悪です。神様が望まれる命にとって脅威となるような自然災害です。「非常に良い」とされた世界において人間と自然は完全に良い関係にありました。洪水、地震、津波、疫病などはエデンの園では人間の脅威になるような形では存在しなかったという説もあります。二つ目は倫理的な悪です。人間が神様の御心に逆らう行動を起こす時起きる悪です。私たちが悪の行動をする時、私たちは創造を傷つけ、神様との距離は広がっていきます。そして他者との関係にも傷が入るようになるのです。私たちは墮落し、壊れた世界に生きています。苦役の無い人生を期待する事はできません。私たちは働きのために創られました。しかし、エデンの園で起きた出来事により労働は汚染されてしまったのです。墮落は神と人との間に壁を作り、人と人との間に壁を作り、人間を養うはずの環境とも壁を作りました。愛の代わりに互いに対する疑いが支配するようになりました。関係の破綻はその後何世紀にも渡り、ねたみ、怒り、そして殺人さえも生み出してきました。今日全ての職場においても、労働者同士の関係の破綻が(多かれ少なかれ)存在します。そしてそれらの人間関係の壁は、私たちの労働をさらに困難なものにするのです。

ディスカッション

- ① 墮落によって労働にどのような影響があったでしょうか。
- ② 神様との関係、人との関係、環境との関係は働く事にどのような影響があるでしょうか。
- ③ 壊れた関係性の中で、私たちには何が出来るでしょうか。

2.2 永遠を失った働き

伝道者の書 1:1-11

伝道者の書の中心テーマは「働き」です。伝道者の書においては働きの困難さを示す言葉として「労苦」（ヘブル後ではアマル）が多用されています。このテーマは1:3の「日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。」という言葉で最初に紹介されます。そして伝道者の労苦に対する評価は「むなしい」（2:1）です。このヘブル語でヘベルという言葉は、伝道者の書で最も使用されている言葉の一つです。このヘベルの直訳は「息」を意味し、そこから実態のない、また永続する価値のないものを表します。しかし、私たちの生存はまさにこの瞬間的な「息」の行為にかかっているのです。しかし、間もなく息は止まり命は終わります。このヘベルというヘブル語もいつかは終わる儂い存在を意味します。しかしそういう意味では「むなしい」という訳し方は少し誤解を生む表現かもしれません。なぜなら全てが無価値であるかのような印象を与えるからです。しかしヘベルという言葉は本当は儂い一時的な価値を意味します。つまり一瞬で吐く息は恒久的な価値は無いかもしれませんが、その瞬間において私たちを生かすものです。同じように私たちのこの移りゆく世界は、一時的な、しかしリアルな価値があるのです。

船の建設を想像してみてください。神様の想像の御業によってこの地球には船を造るための素材が存在しています。人間の知性と苦勞（これらも神様によって与えられたものですが）に

よって安全な、機能的な、そして美しさも兼ね備えた船を造ることが可能です。そして船は人と物を必要とされる場所に運ぶことが出来ます。船が完成し、シャンパンの蓋が開けられた時、製造に関わった全ての人が喜ぶでしょう。しかし一旦港を離れてしまうと、製造者にそれをコントロールすることは出来ません。嵐によって難破するかもしれませんし、悪者によって麻薬の密輸に使われるかもしれません。立派に長い間役目を担うかもしれませんが、最終的には古くなり廃れます。そして最終的にはゴミ処理場行きになります。だからと言って船が悪いものだということにはなりません。船は良いものです。しかし永遠ではないのです。私たちが永遠を失ったこの地で生きる以上、私たちの働きは常にこの緊張関係の中にあります。

ディスカッション

- ① どういう時に働きに虚しさを感じますか？
- ② なぜ私たちは虚しさを感じるのでしょうか。
- ③ クリスマスとして私たちはどのような希望を持っているのでしょうか。

2.3 罪によって汚染された働く動機

創世記 11:1-9

他の古代中近東の都市と同じように、バベルは偉大な神殿、またはジグラットを囲むように設計されていました。ジグラットは神の領域にまで届くことを目的に創られた泥粘土で作られた階段状の塔でした。そのような塔によって、人々は神様の所まで登り、神様は地上に降りてくることが出来ると考えられていました。このような強大な塔を創ろうとする人々の心に、野心とエスカレートする高慢の罪を見ることが出来ます。「彼らは言った。「さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう。われわれが地の全面に散らされるといけないから。」」（4節）彼らは何を欲していたのでしょうか。名声です。彼らは何を恐れていたのでしょうか。散らされ、人数の保証を失うことです。彼らにとって塔は巨大なものでした。しかし創世記の著者は、彼らが創った塔は神様の目にはあまりにも小さく、「人間が建てた町と塔を見るために降りて来られた。」（5節）と語ります。神様は、この世界において計画された平和、秩序、徳とどれだけかけ離れていたか見に来られたのです。

神様のこの塔に対する反対は、それが人々に「しようと企てることで、不可能なことは何もない。」（6節）という期待を与えるということでした。彼らの前のアダムとエバのように、神様のかたちとして与えられた想像力を神様の計画に逆らって行使しようとしたのです。この場合、彼らは文化命令で神様が行おうとしていたことの逆を行おうとしていました。この地を

満たす代わりに、彼らはその場所にとどまろうとしていたのです。神様に与えられた「人」と名前（創世記 5:2）の豊かさを味わう代わりに、彼らは自ら名を上げようとしたのです。神は彼らの高慢と野心は度を超しているのを見られ、「さあ、降りて行って、そこで彼らのことばを混乱させ、互いの話しことばが通じないようにしよう。」（7 節）と言われます。そして

「主が彼らをそこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てるのをやめた。それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。そこで主が全地の話しことばを混乱させ、そこから主が人々を地の全面に散らされたからである。」（8-9 節）

私たちはこの箇所を読むと都市は本質的に悪なのではないかという印象を受けます。しかしそうではありません。神様はイスラエルに首都である都エルサレムを与え、そして究極的な神の民の住処は天から下ってくる神の都なのです。（黙示録 21:2）「都市」という概念自体が悪なのではなく、都市に付随する高慢が神様の怒りを買ったのです。（創世記 19:12-14）私たちがこの世の文化や栄光を神様の代わりとして私たちの意味と目的を見出すとき私たちは罪を犯すのです。

ディスカッション

- ① なぜ人々はバベルの塔をつくろうとしたのでしょうか。そこにはどのような動機があったのでしょうか。
- ② 「都市」の概念自体が悪ではないとしたら、何が悪とそうでないものを区別するのでしょうか。現代の世界ではどうでしょうか。
- ③ あなたはどのような動機で仕事をしているのでしょうか。バベルの塔を築いているような領域はありますか。

2.4 正しいことを行えない罪の現実

ローマ 7 章

罪の力はただ悪い選択や行いをしてしまうということではありません。それはまるで罪が一人一人の精神をハイジャックしたかのようなものです。「売り渡されて罪の下にある」とパウロが言うように(14節)、罪の奴隷となった状態では、私たちは私たちの心の内にある善を行うことが出来ません。これは神様が求められることを行おうとする私たちの意思に反して働きます。(15-16,22節)つまり、何が正しいのかということを知るだけでは、私たちを支配する罪の力に打ち勝つことは出来ないのです!「私は、自分でしたいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています。」(19節) 私たちがこの呪縛から解かれるためには、罪の力よりも力強い聖霊の力の介入が必要となります。そしてそれこそがローマ8章のテーマとなるのです。

私たちは神様が何を望まれるかを知るだけでは、必ずしもその通り行えるわけではないということを知っています。私たちは頭では神様は全ての人を尊敬するように求めていることを知りつつ、職場で同僚や上司の陰口を話してしまいます。どの親であっても子供に対して怒りに任せて怒鳴ることは良くないことを知っています。しかしそうと知りつつも、時に罪の力により彼らはそのように行動してしまうのです。

私たちは一人ではうちに働く罪の力に打ち勝つことは困難です。私たちはキリストの器官である（ローマ 12:5）仲間の助けを求めることを学ぶ必要があります。例えば同業種で働くクリスチャンのスマールグループを形成し、職場で起きた出来事を分かち合い、クリスチャンとしてどのように行動するべきか相談し、具体的な計画を作成します。そして次に集まった時にその結果を報告し、祈り合うのです。このようなスマールグループの存在によって個人で戦うことが困難な罪の問題にもキリストの体として立ち向かうことが可能となります。

ディスカッション

- ① どうして正しいことを知っていても行うことが出来ないのでしょうか。
- ② 職場で「正しい」と思うことを行えなかった経験はありますか。またそれはなぜでしょうか。
- ③ あなたの周りには罪の現実を共に戦う仲間はいらっしゃいますか。どのようにグループとして職場で神様の御心に沿った働き方を励まし合うことが出来るか考えてみましょう。

3.1 私たちのうちに働かれる神の義

ローマ 3:21-26

罪によって私たちの判断が過ちと偽善に向かってしまうのだとしたら、私たちは正義を見出すことが出来るのでしょうか。この問いはローマ3章の大きな逆転に繋がります。この問いに対する神様の答えはキリストの十字架でした。私たちが自ら義を手にすることができないゆえに、神様は自らの義を私たちに与えて下さったのです。キリストの十字架を通してそれは成就されます。ローマ3:26「すなわち、ご自分が義であり、イエスを信じる者を義と認める方を示すため」

神様はキリストの十字架を罪の贖いのための供物として受け入れられたのです。(25節) 十字架を通して、全ての人が神様との関係を回復することが出来ます。私たちが義を欠いていたとしても、神様には無限の義の供給があるからです。キリストの十字架を通して、神様は私たちの壊れた関係性を修復してくださいませ。それは神様との関係、他者との関係、そして全ての被造物との関係です。神様が救いを与えられる時、それは神様の義が与えられることを意味するのです。

キリストの十字架は驚くべきものです。何故なら罪を犯していない神様が生贄となられたからです。これは私たちの職場においてどのような意味を持つでしょうか。もし私たち自身の失敗から問題が生じてしまったならば、私たち自身は自らを正すことが出来なくても、神様は自らの義を私たちの内に、そして私たちを通

して働かせてくださいます。また、他者の失敗によって問題が生じた時も、私たちの救い主の例に倣い、自らを犠牲にすることによって問題を正すことができるかもしれません。

ディスカッション

- ① 「義」と聞いて何を思い浮かべるでしょうか。義の逆は何でしょうか。
- ② 神の義が私たちに与えられるとはどういう意味か考えてみましょう。
- ③ 日々の働きで神の義が私たちのうちに働かれる時、どのようなことが起こるでしょうか。またクリスチャンではない人との間に違いはあるのでしょうか。

3.2 万物の和解

2 コリント 5:16-21

パウロは私たちが「新しい創造」の一員となるほど徹底的に変えられることを願っています。（17-19 節）「創造」ということばは創世記 1-2 章を思い起こさせます。神様が世界を創造された時の記述です。世界のはじめから主は男と女を共に働く者として創造されました。（創世記 2:19）「地を耕す」ように、そして生き物に名前をつけ、神様の代理としてこの地を支配するようにと。（創世記 1:26）神様の創造に対する計画は、別のことばで言うと存在のリアリティの中心として労働が置かれていたのです。人間が神様に反逆し被造物を台無しにしてしまった時、労働は呪いとなりました。（創世記 3:17-18）そして人はもはや主と共に働くということがなくなってしまうました。ですからパウロが「全てが新しくなった」という時、労働も新しくされたものの中の中心的な要素に含まれるのです。

神様は御子を古い創造の元に遣わし、贖うことにより新しい創造を開始されました。キリストにあって、主は世界とご自身とを和解されたのです。それはただ世界の一部ではなく、世界の全てです。そしてキリストに従う者、キリストによって神様と和解された者はキリストの和解の働きをもたらす者として召されているのです。（18 節）私たちは世界の全てに和解をもたらす使節なのです。私たちは日々職場で働きに出かける時、和解の使者として遣わされているのです。それは神様と人との和解（伝道と弟子訓練）、人と人の和解（紛争解決や職場で平和を作ること）、

また人と仕事において（良い働きやサービスは神様が作られた創造の業を助ける物となります）現れます。

和解の働きには三つの中心的な要素があります。まず第一に、私たちは何が起こったために神、人間、被造物との関係が破壊されてしまったのかを知る必要があります。もし私たちがこの世の中の痛みを、罪の現実を知らなければ和解の使者となることは出来ません。それは自らの国のことについて、そして駐在する国について何も知らない人が国を代表する大使の勤めに相応しくないので同じです。第二に、私たちは人々を愛するべきであって裁くべきではないということです。「ですから、私たちは今後、肉に従って人を知ろうとはしません。」とパウロは語ります。（16節）それは他者を利用され、否定され、犯されるべき人としてではなく、キリストが死んでくださり復活されたほどの人としてみるということです。（15節）もし私たちが職場の同僚を裁き、日々の働きや会話の場所からしりぞいてしまうのであれば、私たちは仕事や同僚を「肉に従って」しか知らないことになるのです。もし私たちが共に歩む人々を愛し、そして職場を、製品を、サービスを向上させようと努力するのであれば、私たちはキリストの和解の使者となるのです。

ディスカッション

- ① 和解とはどういう状態を指すでしょうか。和解するためには何が必要でしょうか。
- ② 私たちの現実に和解されるべき領域はあるでしょうか。
- ③ 和解の使者として、まず私たち自身が主と親しい交わりを持っていてでしょうか。

3.3 「救い」の福音

ローマ 1:16-17

「救い」とは何でしょうか。救いとは、神様と人との関係を正しいものに回復させる神様の行為です。そこからわかるように、私たちが救われるべき対象は「壊れた関係」なのです。それは神様との関係、そして人との関係を含み、その関係性の破壊は罪と死の力をこの世に解き放ちます。救いとは、まず最初に全ての関係性の修復なのです。そしてその最初に修復された関係性こそが創造者と被造物、神様と私たちとの関係性の回復です。神様との和解は罪との回復をもたらし、死によって制限されない新しい命を生み出します。クリスチャンは時に、パウロの福音を「信じれば個人的に天国に行ける」という単純なものにとどめてしまいます。もちろんこれは真実なのですが、非常に不十分な説明です。まずこの説明には「私」と「神」以外の関係については何一つ触れていません。しかし、パウロは人と人の関係、そして他の被造物との関係について何度も触れているのです。そしてパウロは信仰について、キリストにあるいのちについて、神の国について、そして死ぬ前と後の「いのち」について語っており、それらはとても一つのシンプルなフレーズに収めることはできません。

同時に、救いは単純に一つの時間軸に止めることもできません。パウロは私たちは「救われた」（ローマ 8:24）と言い、同時に「救われる」と未来系で語ります。（ローマ 5:9）救いとは一回きりの出来事ではなく、続いていくプロセスなのです。神様は一人一人に恵みと誠実さをもって時間をかけて介入して下さいます。その中心的な出来事はキリストの十字架の死と復活です。

「敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させていただいた。」(ローマ5:10)ローマ人への手紙では、クリスチャン個人の回心の瞬間を特に語ってはおらず、むしろ、救いの出来事が過去に起こり、キリストが再び来られる日の完成を待ち望んでいるものであるかのように描いています。個々のクリスチャンの救いに関して、パウロは現在形か未来系を用いるのです。「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」(ローマ10:10)「信じた時」「告白した時」ではなく、「信じて」「告白して」という現在形です。救いとはある時点で与えられて終わりなのではなく、つねに与えられ続けるものなのです。

今私たちは救いの現在進行性を強調しました。その理由は私たちが「働く」ということと「救い」が無関係ではないからです。もし救いが現在進行形のプロセスなのであれば、私たちの働きの中で実を結ぶはずです。さらに具体的には、救いが関係性の修復なのであれば、神様との関係、人との関係、被造物との関係の修復を、私たちは日々働く中で、救いを体現していくことになるのです。具体例としては、勇気を出して会社の不正を暴く時、異なる意見を誠意を持って聞く時、同僚を助ける時、そして人々の生活を豊かにする製品を作る時、私たちは救いの豊かさをこの世にあって現していくのです。

ディスカッション

- ① 「救い」とは何からの救いなのでしょうか。
- ② 私たちが修復されるべき領域はあるのでしょうか。
- ③ 私たちの職場において具体的にどのように救いを現わしていくことが出来るのでしょうか。

4.1 職場において地の塩・世の光となる

マタイ 5:13-16

あなたがクリスチャンとして職場に遣わされている事には大きな意味があります。あなたには地の塩としての使命があります。塩は保存するために用いられます。クリスチャンは文化の中で良いものを保存するのです。古代の世界では塩はとても貴重なものでした。ギリシャ人は塩の中には何か神聖なものが含まれているとさえ考えていました。ローマ人は兵士への報酬を塩で払った事もあるくらいです。自らの職務を全うしなかった兵士は「塩を受けることに値しないもの」とされました。あなたは味付け担当です。あなたは神様の世界観を反映した独特な味を人生の全ての領域にもたらすことが出来るのです。あなたは神様の味付けによって、人生をより味わい深いものに変えることが出来るのです。

塩がその役目を果たすためには、保存する対象である肉や魚と接点を持つ必要があります。私たちが効果的な塩になるためには、私たちが生きる場所、働く場所に積極的に関与していかなければいけないのです。それは私たちを緊張させます。なぜなら支配的な文化は私たちの事をあまり好ましく思っていないからです。神様の御言葉に従って仕事をする事で成功を得られる事も多くあるでしょう。しかし、私たちはそうでない時のために備えておく必要があります。もし憐れみを見せる事、平和をつくる事、また正義のために働く事が私たちの職場での立場を危ぶませる事になった場合どうすれば良いのでしょうか。この世から逃避することは、クリスチャンにとっての答えではありません。しかし、

この世界で生きる事も、常に異なる教えに立ち向かうことは困難です。マタイ 5:10-12 で、イエス様は迫害の現実を語っています。しかし、私たちはこの世の文化と接点を持つ時、私たちの「塩気」を保っている必要があります。私たちはそのバランスを保つように召されたのです。

「あなたがたは世の光です。」クリスチャンの職能は自らの聖さを保つだけではなく、私たちの周りの人々の人生に触れます。私たちは職場でイエス様の事を知らない大勢の人々と出会います。イエス様を証しするのに最も適した場所かもしれません。しかし私たちはどのように職場でイエス様を証しするのか注意する必要があります。第一義的に私たちは仕事によって報酬を得ているのですから。そして私たちは常に、職場での失敗によりイエス様の御名を貶めてしまう可能性もあります。伝道は非常に熱心なのに実際の仕事での成果が上がらない場合などは特にそうです。

これらの危険性を考慮した上で、どのように私たちは職場において地の塩・世の光となる事が出来るのでしょうか。イエス様は、私たちの「光」とは私たちの「言葉」ではなく、「良い行い」にあると語っています。(16 節)山上の説教は良い行いの指針を与えてくれています。主に対する謙遜と服従を持ちつつ、私たちは正しい関係性を持ち、憐れみの心を持ち、平和のために働くのです。

ディスカッション

- ① 塩と光にはそれぞれどのような特徴がありますか。
- ② あなたの職場で塩・光になるとは何を意味するのでしょうか。
- ③ 「良い行い」とは具体的にどういうことでしょうか。

4.2 舌を制御する

2 テモテ 2:14-26

次の箇所パウロはテモテに職場にも直接適応可能な勧めをしています。パウロはテモテに何度も「ことばについての論争」（14節）、「俗悪な無駄話」（16節）、「愚かで、無知な議論」（23節）を避けるように警告しています。これはクリスチャンにとっては休憩所で交わされる全ての会話が、たとえ直接罪ではなかったとしても、有益ではないという事を思い起こさせてくれます。私たちが交わす会話は私たちの周りの人たちにとって助けとなっているのでしょうか。私たちの言葉は和解と贖いの使節となっているのでしょうか。（5:20）悪い会話というものは腫物のように広がり（17節）、不敬虔と滅びを招き（14,16節）、争いを引き起こします（23節）。

そして、実は最も重要な未信者の同僚への証というのは、私たちがイエス様の事を語っていない会話の時に起こるのです。一つの噂話は千の信仰と励ましの言葉を破壊しうる力を持っています。しかし、言葉によって同僚を絶えず励まし、感謝し、心遣いを示す事ができるクリスチャンは、たとえ直接的にイエス様のことを語っていなかったとしても、強力なキリストの証人となるのです。謙遜さを持ち、人を裁く事を避けることは、無意味で愚かな論争を避けるのに最も確かな方法です。パウロはまたテモテに「若いときの情欲を避け」（22節）るように教えます。この罪の問題は職場にも影響を及ぼしうるものです。アルコールと麻薬中毒はどんな職場にも影響を及ぼすでしょう。飲み会の場で発せられる言葉も職場に悪影響を与える場面が多々あります。さらに

「インターネットを使う従業員の四分の一がポルノサイトを就業時間中に訪れ・・・アクセスは他の時間よりも就業時間中が最も高い」という統計があるように、個人の罪の問題は職場にも侵入してきます。人の罪が入り込む職場の状況の中でクリスチャンはどのような言葉を発するべきでしょうか。

また、もう一つクリスチャンの働き人に適応可能な勧めは「主のしもべが争ってはいけません。むしろ、すべての人に優しくし、よく教え、よく忍耐し、反対する人たちを柔和に教え導きなさい。」(24-25節)との教えです。ここでパウロが描いているテモテの姿はクリスチャンが職場において目指すべき姿でもあります。テモテに手紙を書いているパウロが、テモテを主のしもべとして教え訓戒し、助ける交わりとなりました。クリスチャンを助けるどのような交わりがあなたの周りにはあるでしょうか。

ディスカッション

- ① あなたは職場での言葉遣いについて気になった事がありますか。
- ② キリスト者としてどのように言葉を用いる事が適切だと思いますか。
- ③ クリスチャンが助け合うためのどのような交わりが私たちの周りにあるでしょうか。

4.3 怒りを避けて聞く

ヤコブ 1:19-21

ヤコブは「聞く」事についての実践的な教えを続けます。クリスチャンは人（19節）と神（1:22-25）と両方によく「聞く」必要があります。「聞くのに早く、語るのに遅く、怒るのに遅くありなさい。」（19節）私たちは神の言葉が「すべての汚れやあふれる悪を捨て去るため」に「聞く」のです。興味深いことに、ヤコブは他者に聞くこと（神様に聞くだけではなく）が私たちの汚れを取り除く手段になると語っています。彼は神様の言葉を他者が私たちに語ると言っている訳ではありません。彼は他者に聞く事は、御言葉に従う事を難しくさせる私たちの「怒りと高慢さ」を取り除くと語っているのです。怒りと高慢さが心にあると、神様の声を聞きにくくなります。「人の怒りは、神の義を実現するものではありません・・・心に植えつけられたみことばを素直に受け入れなさい。」（20-21節）

他者に気に触れることを言われた時、不同意、批判、拒絶などといった怒りで応答することは、特にストレスが多い「職場」という環境においては簡単なことです。しかしそのような応答は多くの場合私たちの立場を悪化させ、キリストのしもべとしての品位を損ないます。自分自身を怒りのことばで守るより、神様が私たちを守ってくださると信頼することの方がどれほど良いことでしょうか。このアドバイスはすべての仕事と職場において適応可能です。

また「聞く」ということはビジネス界において重要なリーダーシップのスキルとして認識されています。ビジネスは顧客、従業員、投資家、地域、すべてのステークホルダー（関係者）から「聞く」必要があります。人々の真のニーズ（必要）に応えるために、企業はニーズを答えようとする人々からまず「聞く」必要があります。このことは職場が神様の働きのための「良い地」になりうることを思い起こさせてくれます。ローマ帝国が迫害下においても「良い地」であったように。

ディスカッション

- ① 職場で何かに対して怒りを覚えた事がありますか。
- ② どうすれば「怒り」の感情を回避する事ができると思いますか。
- ③ 今回の聖書箇所とイエス様の生き方をふまえて、クリスチャンとしてどのように「怒り」の問題に対処すれば良いと思いますか。

番外編 二つの都①バビロン

黙示録 18:4-20

黙示録で語られる労働に関する最も重要な事柄は終わりの数章に記されています。そこではこの世の都バビロンと神の都新しいエルサレムが対比されています。17:1 と 21:9 の二つの都の紹介の類似性から、明らかに対比として書かれていることがわかります。

バビロンとは神様抜きに人間が自らの文明を築こうとした時の行き止まりを示しています。一見それは人類が求めたパラダイスのように見えます。17:4 で語られる、新しい都エルサレムのようにバビロンに金や宝石が満ちていることは偶然ではありません。更にバビロンは新しいエルサレムのように各国から富を受け取っています（18:3 や 18:15-19 に登場する商人たちによって）。しかしそれは偽りの都であり、神様の最後の裁きによって裁かれる都なのです。11-13 節に登場する富のリストは象徴的です。これはエゼキエル 27:12-22 に登場するツロの陥落を記した時のリストを土台にしつつ、ローマ時代に人気だった贅沢品を加えたものでしょう。このリストで注目すべきなのは最後の 13 節の「奴隷」と「人のいのち」です。自らの快樂を満たすためには人のいのちを搾取することも厭わないバビロンの搾取の現実を現しています。

神様が商売に関して裁きを下すという事実にはハッとさせられます。黙示録の中で経済は明らかに道德の問題として取り扱われ

ているのです。ほとんどの裁きの原因はわがままな自己中心性から来るということは現代の消費社会に警鐘を鳴らします。より多く、より良いものを求める文化においては、近視眼的な物質的な必要を満たすことに目が奪われてしまいます。しかし、最も恐ろしいことはバビロンが新しいエルサレムと非常に似ているということです。神様は良い世界を創造しました。私たちは人生を楽しむように創られました。神様はこの世の美しいものを喜ばれます。もしこの世界が明らかに汚れていたならばクリスチャンがそこに落ち込む危険は少なかったでしょう。しかし科学技術の進歩や世界的な貿易による利益が危険を生み出しているのです。バビロンは神様の存在を欠いた中でエデンの園の全ての栄光を約束しているからです。それは少しずつ、しかし確実に神様の良い賜物（経済、農業、職人の技等）を偽りの神に仕えるものへと変えてしまうのです。

ディスカッション

- ① 黙示録に記されているバビロンと現代の世界とどのような類似点があるでしょうか。
- ② バビロンとエルサレムは紙一重だと黙示録は語ります。神様の存在の有無はどのような違いを生むでしょうか。
- ③ あなたの現在の働きにバビロンのような要素はあるでしょうか。もしあるとしたらどうすれば神様の存在を認めながら働くことができるでしょうか。

番外編 二つの都②新しいエルサレム

黙示録 21:10-22:5

前回の学び（バビロン）の後、この地上の経済活動に参加すること自体が偶像礼拝に溢れており、私たちに残された道は誰もいない場所で隠遁生活を送ることかのように感じてしまうかもしれません。しかし黙示録はもう一つの町のビジョンを描き出します。新しいエルサレムです。この町は「天から降りてくる」町であり、神様の恵みの現れでもあります。それは人間が自ら築き上げたバビロンとは大きな対比を生み出します。

ある次元において、新しいエルサレムとはエデンへの回帰です。町の真ん中には川が流れ、その兩岸にはいのちの木があり、十二種の実がなり、その木の葉は諸国の民を癒したとあります。（2節）人間はもう一度神様と共に平和のうちを歩むことができるようになったのです。しかし新しいエルサレムはただ新しくより良い園であるというわけではありません。それは園と都が一体となった町であり、バビロンとの対極を示すものです。たとえば、天から下った町であるにも関わらず、そこには人間の参与する土壌が残されています。その中心はもちろん神様と子羊に対する人々が捧げる礼拝です。しかし「地の王たちは自分たちの栄光を都に携えて来る。」とも記されています。（24節）古代世界において、神殿を造るに当たり最高の素材を世界中から集めることが良しとされていました。それはエルサレムの神殿を造るときにソロモンがしたことです。さらに神殿が完成した後も、人々は神殿を飾るために遠くから贈り物を携えてきたのです。国々の王が新しいエルサレムに贈り物を携えてくるイメージはこのような

歴史的背景からきているのでしょうか。そしてこの描写を、人間の文化によって作られたものが神様の栄光のための贈り物として捧げられていくイメージで捉えることは、十分あり得る解釈でしょう。

具体的にこれがどのような意味を持つのか考えることは簡単ではありません。新天新地に農業は存在するのか、地上のコンピュータープログラムは新しい都でどのような意味をもつのか。聖書は直接的にはこれらの問いに答えていませんが、私たちはもう一度全体像を見たいと思います。神様は創造性を持ってこの地を管理するようにと人間を創造されました。そうであるならば、その同じ神様が地上で信仰によって行われた働きを全て無意味なものとして処理されるのでしょうか？そうではなく、神様はご自身の栄光のために地上での働きを完全に完成されると考えたほうが自然です。それが具体的にどのような形をとるのかは分からないとしても、私たちは自分たちの労苦が主にあって無駄にならない（第一コリント 15:58）ことを確信して働くことが出来るのです。

ディスカッション

- ① 新しい都エルサレムはどのような点でバビロンと異なるでしょうか。
- ② エデンの園と新しい都エルサレムにはどのような違いがあるでしょうか。
- ③ 私たちの地上での働きは、どのように新しい都エルサレムにおいて神の国の栄光のために用いられると思いますか。

コラム：世界の終わり=仕事の終わり？

2 ペテロ 3 章

2 ペテロ 3 章は、私たちが今まで見て来たような(1)被造物の持つ本来の善さ(2)この世界とのちに来る神の国の継続性の 2 点において一見否定的にとらえているように思われがちです。ペテロは、神の国は現在の世界との継続性は一切なく、この世界が「焼けて崩れ去る」(12 節)ものように描いているように見えます。

しかし 2 ペテロ 2:17 と 2 ペテロ 3:12 を黙示文学の規則に従って読むとき、「火」や「溶ける」というイメージは神様が善と悪を区別することの象徴であることがわかります。ペテロは第一の手紙において火をそのように用いているのです。火の試練を通して試された信者は神様からの賞賛を受けます。(1 ペテロ 1:5-7) これらの箇所は天と地が文字通り「焼け崩れる」ということよりも、むしろすべての悪が完全に滅ぼされることを強調しています。同様に、ペテロは注意深く、世界を試練と変化を現わす言葉を用いて表現しています。(例：「崩れ去る」「焼け溶ける」「裁き」等) ダグラス・ムーは、ペテロが用いた「崩れ」という言葉(ルオー)は破壊ではなく、劇的な変化を示していると述べます。彼は別の訳として「新しくされる」(undone)を提唱しています。¹

ペテロのノアの洪水に関する言及(5-6 節)は「滅びた」(6 節)という言葉を完全な破壊として理解することに関して注意を呼びかけます。世界は完全に破壊されて滅ぼされたのではなく、人類の悪が全て聖められたのです。人類の良さ(ノアの家族、所有物、そして箱舟の動物達)は保たれ、物理的な地上においてその営みは続いていったのです。

最後に、ペテロの究極的な未来に対するポジティブなビジョンは、物理的な世界の刷新を描いています。「しかし私たちは、神の約束にしたがって、義の宿る新しい天と新しい地を待ち望んでいます。」(13 節)これはただ

¹ Douglas Moo, "Nature in the New Creation: New Testament Eschatology and the Environment," *Journal of the Evangelical Theological Society* 49, no. 3 (2006), 468

の空間を持たないユートピアではなく、「天」と「地」を持つ新しい世界なのです。10節の最後は英語の聖書（NIV 訳や ESV 訳）において“the earth and everything that is done on it will be disclosed.”「この地と地にある働きは明らかにされます。」と訳されています。破壊ではなく「明らかにされる」のです。つまり、火によって燃やされた後にも働きは継続するということでしょう。

2 ペテロは労働の永遠の価値について語っている中心的な箇所ではありませんが、その神学と矛盾してはいません。詳細は描かれていないものの、ペテロにとって私たちがこの地上で行うことと新しい天には継続性があるのです。全ての悪は破壊されますが、全ての善きものは新しい創造において永遠の価値を得るのです。火は焼き尽くすだけでなく聖めます。燃やされることは労働の終わりを意味するのではなく、神様のための働きが新しい天と新しい地において意味を持つのです。

2018年11月初版発行

著者 Theology of Work Project

<https://www.theologyofwork.org/>

翻訳・追記 岡谷和作（KGK 主事）

発行者 キリスト者学生会

発行所 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-1 OCC ビル 3階

Tel: 03-3294-6916

— 働くことの聖書的な意味 —



THEOLOGY
OF
WORK